

原 著

## 英語教育におけるアルファベット文字体系について

瀬田 幸人 (岡山大学教育学部)

本稿は、まず、中学校における英語学習の過程において、学習者の障壁となり得る要素の内のいくつかは、アルファベットという文字体系と深く関係していることを指摘する。次に、英語教育内容学という観点から、将来英語教師を目指す学生に、教育現場で必要とされる実践的な応用力を身につけさせるためには、大学の講義ではアルファベットに関してどのような知識を提供すべきであるかについて論じ、実践的な教授手順と共に具体的な教授内容を提示する。

キーワード：アルファベット、仮名、文字体系、英語教育内容学

### I. はじめに

教育学部における教科専門科目としての英語学の授業のあり方を問い直す動きの中で、2001年度日本教育大学協会中国地区外国語部門連絡協議会では、中国地区の国立大学すべての教育学部英語教育講座において、教科内容学の研究に着手することが採択され<sup>1)</sup>、英語教育に携わっている各大学の教員一人ひとりが新たな研究に取り組むこととなった。各大学の代表者によるワーキンググループを中核として教科内容学についての研究が進められ、その成果は松浦他 (2002) で提示された。

英語教育内容学は、今まで科学として確立されてきた英語学、英米文学、比較文化学等の学問的体系をそのまま英語科内容学として教授する立場を離れ、小学校・中学校・高等学校での英語教育の実践を念頭において、大学で各種学校の英語教員を養成するための、英語教育の目的、内容、方法の有機的な連携を目指した英語教育固有の学問としての体系化の可能性を探究するものである。実際、この観点に立った研究は、特に英語学領域において行なわれてきた。瀬田・脇本・小迫 (2002a)、瀬田・脇本・小迫 (2002b)、脇本・瀬田・小迫 (2003)、小迫・瀬田・脇本 (2005) では、音声学・音韻論、統語論、形態論、語用論などの学問分野に基づいて、あるいは社会言語学やコーパス言語学の枠組みから、さらには英語史という通時的な観点から、それぞれ具体的な実践教授モデルが提案されている。

本稿では、英語教育内容学という視点に立って、特に中学校における英語学習の過程において障壁となり得る要素のうち、アルファベット (字母とも呼

ばれる) に係るものを取り上げ、将来英語教師を目指す学生に、教育実践現場で生じるであろう問題点を解決したり、生徒からの質問に答えたりすることを可能にする実践的な応用力を身につけさせるためには、大学の講義においてどのような教育内容が必要であるかについて論じる。

### II. 英語教育内容研究としての文字体系

漢字仮名交じりの日本語の文字体系に慣れている日本人にとっては、英語学習に際して、いくつかの点で大きな困難に直面する。例えば、既に瀬田・脇本・小迫 (2002a: 62-64) で論じたように、英語の音声面の学習では、英語と日本語の音韻体系、とりわけ音節構造 (つまり、子音 (C) と母音 (V) の結合の仕方) の違いが大きな障害となる。英語の場合、音節は「母音を中心にして前後に子音が並んだ音の単位」と言える<sup>2)</sup> が、日本語の場合は「母音のみ、あるいは子音とそれに続く母音からなる単位」であるため、英語の dress や street は日本人学習者にとっては発音が非常に難しくなる。というのも、dress /dres/ は CCVC という音節構造をしているが、日本語の音節構造は CC- のように子音が連続する単位も、-VC のように子音で終わる単位も含まないからである。従って、1音節の dress /dres/ (CCVC) は、日本人学習者にとっては「ドレス」/doresu/ (CV・CV・CV) のように3音節で発音してしまうことになる。street (CCCVC) のような子音が3つ連続する語になると発音は一層困難となる。

このような英語と日本語の音声面の違いは音韻体系だけの問題に留まらず、実は、文字体系の問題

でもある。実際、英語の子音や母音のような単音 (phone) を表すために考案されたのがアルファベット<sup>3)</sup>であり、/a/, /i/, /u/, /e/, /o/ という5つの単音 (基本母音) の他はすべて子音1つと母音1つから成る音節 (CV) を表す日本語の仮名 (平仮名および片仮名) とは大きく異なる。教授者は、特にこの点を十分に押えておく必要がある。そうでないと、音声指導は言うまでもなく、スペリング指導や語彙指導を適切に行なうことが困難になるものと予測される。

しかしながら、英語のアルファベットや日本語の仮名のような文字体系についての知識は、残念ながら大学の講義で与えられる機会はないのではと推察される。「英語学概論」や「英語学入門」のような講義では、主として音韻論 (音声学)、統語論、形態論、意味論などが扱われ、場合によって、語用論、情報構造、日英語の比較 (語彙、語順、文構造) などが取り上げられるが、文字や文字体系についての研究<sup>4)</sup>については言及されることは恐らくないであろう。

さらに、「英語史」のような講義においても、古英語から論じられるのが一般的で、場合によって印欧語族からの言語系統について軽く言及する程度で、文字や文字体系について解説されることはほとんどないようである。<sup>5)</sup>

このような状況を踏まえて、文字や文字体系についての内容は、英語史の中でよりも英語学概論や英語学入門のような講義の中で取り上げ、英語教育内容学という観点から解説してもらうことを提案したい。以下では、将来の英語の指導者として大学生が基礎知識として学んでおくのが望ましいと思われる教育内容についていくつか提示する。

### Ⅲ. 文字体系に係る教育内容

前節で述べたように、アルファベットと日本語の文字体系についての基礎知識を身につけることは、音声指導やスペリング指導などの教育実践の場において、より効果的な指導を可能にするのみならず、生徒達の疑問に答えることのできる実践的な応用力の養成に不可欠だと思われる。では、基礎知識としてどのような教育内容を考えたらよいのであろうか。

英語を教えるときに最も重要なことの一つは、アルファベットとはどのような文字体系であるのかを理解しておくことである。そのためには、まず、アルファベットの起源と伝播についての知識は不可欠であると思われる。また、アルファベットと対立す

る、日本人学習者が普段用いている仮名 (平仮名・片仮名) についても、その起源について簡単に触れて確認しておくことは必要であろう。さらに、アルファベット文字体系と漢字仮名交じり文字体系の本質的な違いについても知っておくことは意味のあることだと思われる。以下、この順に、具体的な教授内容を提示していく。

#### 1. アルファベットの起源と伝播

アルファベットの起源については、実は不明な点も多く、はっきりしていないのが現状である。そのため、いくつかの主要な説について簡単に見ておく程度でよいと思われるかもしれないが、最も説得力があり有力であると思われる説を取り上げて解説することは必要である。代表的な説としては、最古のアルファベットは、紀元前15世紀頃に地中海東岸で用いられていたフェニキア文字とする説<sup>6)</sup>、紀元前14世紀にシリアの北海岸 (現在のラス・シャマラ) で用いられていたウガリット (Ugarit) 楔形文字とする説<sup>7)</sup>、紀元前第三千年紀に古代エジプト人によって用いられていた象形文字 (聖刻文字、ヒエログリフとも呼ばれる) を起源とする説<sup>8)</sup> などを取り上げるとよい。このうち最後の説を、最も説得力がある説として解説することになるが、この場合、アルファベットといっても、英語のように子音と母音の両方を表すアルファベットではなくて、子音のみを表すアルファベット (正確には単子音 (子音が連続した2子音や3子音ではなく) を表すアルファベット) で、下の図1に見るような「子音アルファベット」 (consonantal alphabet) と言われるものであった点は是非とも押えておきたい。

記号	転写字母/意味	音価
	ʒ / vulture	glottal stop
	i / flowering reed	I
	y / two flowering reeds	Y
	y / oblique strokes	Y
	ʿ / forearm and hand	Semitic 'ayin
	w / quail chick	W
	w / cursive for	W
	b / foot	B
	p / mat	P
	f / horned viper	F
	m / mat	M
	n / water	N
	r / mouth	R
	b / reed shelter	H
	h / twisted flax	H (slightly guttural)
	h / sieve (?)	KH (as in Scottish loch)
	h / animal's belly	KH (soft)
	s / door bolt	S
	s / folded cloth	S
	š / pool	SH
	k / hill	Q
	k / basket with handle	K
	g / jar stand (?)	G
	t / loaf	T
	ʔ / tethering rope	CH (as in chin)
	d / hand	D
	ʔ / snake	J

図1 古代エジプトの子音アルファベット

(Fischer (2001:40) より引用)

ここで、古代エジプト象形文字起源説の内容については、次のような手順で解説するとよい。

(i) まず、古代エジプトの原始アルファベット、つまり単子音のみを表すアルファベットの原理が、エジプトに住んでいたセム系の諸民族によってセム語に取り入れられる。ここで重要なことは、セム語などのセム系言語では文字は子音のみを表すという特徴を持つ点を押えることである。また、この古代エジプト語の子音アルファベットからセム語の子音アルファベットへの移行の段階で重要な働きをしたと考えられているのが、紀元前 1800～1600 年頃の原因シナイ文字（この名称はエジプト北東部のシナイ半島の遺跡から発見されたことに由来する）であったことを付け加えてもよい。<sup>9)</sup>

(ii) その後、セム語の子音アルファベットは、地中海沿岸の港を支配していたフェニキア人によって、絵文字的なものから絵文字的でない線形のものと改変され、近隣地域に広まる。

(iii) フェニキア人と交易のあったギリシア人も、およそ紀元前 10 世紀、遅くとも紀元前 850 年頃

に、このフェニキア・アルファベットを借用したと言われている。<sup>10)</sup> ここで非常に重要なことは、子音中心のセム系言語のフェニキア語と違い、印欧語族に属すギリシア語では母音と子音は両方とも対等に用いられており、そのためギリシア人は新たに母音音素を表す記号を造る必要があったという点である。分かりやすい例として、母音記号 A (アルファ) を取り上げ、下の図 2 を提示しつつ解説するのは効果的だと思われる。解説の仕方としては、フェニキア文字の 'alep (アーレブ) の最初の子音 (') は声門音で、ギリシア語にはない音素であったため、ギリシア人は、その子音記号 (') の声門音は使わず a の音価だけを使って母音記号 A (アルファ) を造った、ということだけで十分である。なお、場合によっては、同様にフェニキア文字の hē (へー) から E (エプシロン)、yōd (ヨード) (つまり y- の音) から I (イオータ)、'ayin (アイン) (つまり声門音 (')) から O (オミクロン) をそれぞれ造り、また他の言語から Y (ユプシロン) を取り入れて、ついにギリシア語を表すのに必要な短母音のための記号をすべて手に入れたということも解説してもよい。<sup>11)</sup>

フェニキア文字	転写字母	音価	ギリシア文字	転写字母	音価
𐤀	aleph	ʾ	Α	A	alpha
𐤁	beth	b	Β	B	beta
𐤂	gimel	g	Γ	Γ	gamma
𐤃	daleth	d	Δ	Δ	delta
𐤄	he	h	Ε	E	epsilon
𐤅	waw	w	Ϝ	Ϝ	digamma
𐤆	zayin	z	Ζ	Z	zeta
𐤇	heth	h	Η	H	eta
𐤈	teeth	t	Θ	Θ	theta
𐤉	yod	y	Ι	I	iota
𐤊	kaph	k	Κ	K	kappa
𐤋	lamed	l	Λ	L	lambda
𐤌	mem	m	Μ	M	mu
𐤍	nun	n	Ν	N	nu
𐤎	samekh	s	Ξ	X	xi
𐤏	ayin	ʾ	Ο	O	omicron
𐤐	pe	p	Π	P	pi
𐤑	sa'de	s	Ρ	R	rho
𐤒	qoph	q	Σ	S	sigma
𐤓	res	r	Τ	T	tau
𐤔	sin	sh/s	Υ	Y	upsilon
𐤕	taw	t	Χ	X	chi
			Ω	Ω	omega

図2 フェニキア文字からギリシア文字への変遷

(Robinson (1995:166) より引用)

ギリシア人が紀元前5世紀には、すでに今日の英語のアルファベットに似た、子音字と母音字から成るアルファベット<sup>12)</sup>を完成させたことは、文字の歴史において類を見ない偉業であったという点は特に強調したい。

なお、子音アルファベットと、子音と母音の両方を表す英語のアルファベットの違いについては、時間が許せば少し解説を加えておきたい。まず、子音のみを表す子音アルファベットは、古代エジプトの象形文字だけに見られるものではなく、今日でもヘブライ語やアラビア語などのセム系言語の文字に多く見られるということを確認させたい。特に、アラビア文字は、アラビア半島を始め、近東全域、アジア西部、中央アジア、東南アジアなどの広い地域で用いられ、イスラム教の聖典に使われているということもあり、世界で最も重要な文字の一つとなっている点も指摘しておきたい。アラビア文字は、基本的に子音を表し、母音については点などの発音区別符号をつけて表されることもあるが、最も頻用される短母音の符号は省略されるため、母音の特定は聞き手の判断に委ねられるということも指摘しておきたい。さらに、下の(1)のようなヘブライ語の例をあげて、(1a)の3文字が(1b)のような4～5通りの意味に解釈されることを示したり、(2)のような英語の例をあげて、(2a)と(2b)を対比させてみたりするのも、子音アルファベットについての理解を深めるには効果的であると思われる。<sup>13)</sup>

(1) a. ktv

b. katav (=I wrote) / kotav (=I write, a writer) / katoov (=written) / kitav (=letters, script) / (kitovet (=address))

(2) a. W cn rd bth cnsnnts nd vwls.

b. We can read both consonants and vowels.

(iv) ギリシア・アルファベットは、その後、イタリア半島のエトルリア人に引き継がれる。<sup>14)</sup>ここで重要なのは、エトルリア人は、アルファベット文字に対して、ギリシア人が借用したセム文字の古い名称は引き継がず、実際の音価に基づいて彼ら独自の名称をつけたという点である。その結果、エトルリア人がアルファベット文字につけた名称のほとんどが今日よく知られている英語のアルファベット文字の名称になったと言われる。<sup>15)</sup>

(v) 紀元前7世紀、エトルリア・アルファベットはローマ人に受け継がれる。ここで押えておきたいのは、ローマ人は(紀元前3世紀に)エトルリア文字Cから有声音/g/を表す文字Gを新たに造るなどの重要な変更を加えたという点である。<sup>16)</sup>このローマ・アルファベット(ラテン・アルファベットとも呼ばれる)は、ローマの強大な軍事力と経済力に支えられて西ヨーロッパ各地へと広がり、現代の西ヨーロッパ諸国の文字の基になったことも押えておきたい。

(vi) 紀元800年頃に、ローマ・アルファベットに最後の変更が加えられる。Vの文字を2つ続けて/w/の音を表すWや、母音の/u/を子音のVと区別するために作られたU、そしてIという文字の子音の機能を区別するために作られたJが新たに追加されることになる。こうして、ローマ・アルファベットは現代の英語のアルファベットへと発達することになる。<sup>17)</sup>

まとめの意味でも、下の図3のような、フェニキア・アルファベット文字から現代ローマ・アルファベット文字までの変遷を示した図を提示することによって、理解の定着をはかるのも非常に効果的だと思われる。

フェニキア 文字	初期ギリシア 文字	古典ギリシア 文字	エトルリア 文字	初期ラテン 文字	現代ローマ 文字
𐤀	Α	Α	Α	Α	Aa
𐤁	Β	Β	Β	Β	Bb
𐤂	Γ	Γ	Γ	Γ	Cc
𐤃	Δ	Δ	Δ	Δ	Dd
𐤄	Ε	Ε	Ε	Ε	Ee
𐤅	Φ	Φ	Φ	Φ	Ff
𐤆	Η	Η	Η	Η	Gg
𐤇	Θ	Θ	Θ	Θ	Hh
𐤈	Ι	Ι	Ι	Ι	Ii
𐤉	Κ	Κ	Κ	Κ	Jj
𐤊	Λ	Λ	Λ	Λ	Kk
𐤋	Μ	Μ	Μ	Μ	Ll
𐤌	Ν	Ν	Ν	Ν	Mm
𐤍	Ξ	Ξ	Ξ	Ξ	Nn
𐤎	Ο	Ο	Ο	Ο	Oo
𐤏	Π	Π	Π	Π	Pp
𐤐	Ρ	Ρ	Ρ	Ρ	Qq
𐤑	Σ	Σ	Σ	Σ	Rr
𐤒	Τ	Τ	Τ	Τ	Ss
𐤓	Υ	Υ	Υ	Υ	Tt
𐤔	Χ	Χ	Χ	Χ	Uu
𐤕	Ψ	Ψ	Ψ	Ψ	Vv
𐤖	Ω	Ω	Ω	Ω	Ww
					Xx
					Yy
					Zz

図3 古いアルファベットから新しいアルファベットへの変遷  
(Crystal (1987:202)に基づく)

## 2. 日本語の文字体系の始まり

ここでは、漢字と仮名に係る教授内容を示すが、扱う内容については、次のような流れで説明するとよい。

(i) まず、漢字については、紀元3世紀頃に朝鮮経由で日本に漢字が伝えられたらしいと言われている<sup>18)</sup>ことを示す。なお、日本に漢字が入って来る前に文字があったかどうかは、現在のところはっきりとしていないことについても示しておく方がよい。

(ii) 日本最古の歴史書である『古事記』(紀元712年完成)について触れ、『古事記』が漢文で表記されていたことを確認させる。ここで重要なことは、そもそも古代日本語は、古代中国語とは大きく異なり、単音節ではなく複音節であり、しかも膠着語(=単語の屈折・語尾変化によって文法関係を表す言語)であったため、漢字は日本語を表すのには不便で適していなかったということを理解させることである。

(iii) その結果、日本語に漢字を取り込む工夫として、漢字の意味だけではなく音も借用することになる。具体的には、漢字の意味とは無関係に音のみで46の漢字を選び、5つの母音(/a/, /i/, /u/, /e/, /o/)と41の‘子音+母音’(/ka/, /ki/, /ku/, /ke/, /ko/, …)から成る音節表を造り出した<sup>19)</sup>ということを説明するとよい。

(iv) この音節表のお陰で、例えば/kuni/(国)は久利、/ame/(天)は阿米、/kokoro/(心)は許己呂のようになり、日本固有のことば(「和語」または「やまとことば」と呼ばれる)は漢字を用いて音表記されることになった点は押えておきたい。なお、和語の音を表記するのに用いられたこのような漢字は万葉仮名

(この名称は万葉集に多く用いられたことに由来する)と呼ばれることも教えたい。さらに、時間があれば、この万葉仮名も非常に不便で、8世紀には、88種類の日本語の音節を表すのに970以上もの漢字が使われた<sup>20)</sup>というような事実にも触れておきたい。

(v) 最後に、このような状況の中で、漢字を単純化した日本独自の仮名(この名称は本来の字である真名(=漢字)に対する「仮のな(=字)」に由来する)と呼ばれる2種類の音節文字——一つは、8世紀から9世紀にかけて万葉仮名の草書体(草書体の一覧表

を提示するのも効果的である)から生まれたとされる「平仮名」で、もう一つは、9世紀に生まれたと言われる「片仮名」——が現れたことを示す。なお、平仮名については、平安中期の偉大な文学作品である紫式部の『源氏物語』がすべて平仮名で書かれていたことに触れるのもよい。また、片仮名については、平仮名の場合とは違い、「伊」→「イ」、「宇」→「ウ」、「江」→「エ」、「加」→「カ」、「多」→「タ」などのように万葉仮名(つまり漢字)から直接派生されたことを確認させてもよい。いずれにしても、12世紀の終わりまでには、現在のような漢字表記と仮名表記の併用が行われ、現代に至るといふ歴史的な流れについては是非とも押えておきたい。<sup>21)</sup>

## 3. アルファベット文字体系と漢字文字体系の比較

ここでは、英語に代表されるローマ[ラテン]・アルファベット(以下、単にアルファベットと表記)と漢字の文字体系を比較して、それぞれの特徴を理解してもらうことが狙いとなる。

## 3. 1 文字の表音性

文字を表音(つまり、1文字で1音あるいは1音節を表すこと)という観点から見ると、それぞれの文字体系の違いが明らかになってくる。アルファベットは、子音と母音の両方とも表せるため、多様な言語音を表すことが可能となるが、一方、漢字の場合は、表音の機能は持つものの、主な働きは表語(つまり、1文字で1語を表すこと)であるため、意味(概念)を表すのには適しているが多様な言語音を表すには適していない文字体系と言える、という点は押えておく必要がある。これに関連して、漢字文字体系を基本とする中国と違って、日本の場合は、漢字以外に表音文字(音節文字)の片仮を取り入れた文字体系を使用しているため、日本語にはない外国の地名や人名のような、漢字のみでは表し難い場合でも、仮名(普通は片仮名)を用いることによって、アルファベットほどではないにしても、ある程度は対応できるという点に触れておきたい。

大事なことは、アルファベットのように表音を中心的な目的とする文字もあれば、漢字のように表語や表意(つまり、意味(概念)を表すこと)を中心的な目的とする文字もあるという点と、仮名は、アルファベットほど完全ではないが、表音を中心的な目的とするという点を理解させることである。

### 3. 2 文字の表語性

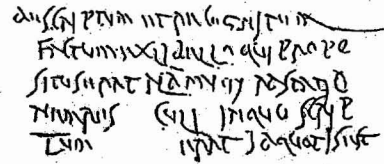
文字を表語という観点から見ると、例えばスペリング指導に際して、いくつかの有益なヒントが得られる。まず、アルファベットの場合は、文字 (letter) の結合、すなわちスペリングが表語単位となるが、一方、漢字の場合は、1 字ごとに区別され、基本的に 1 字 (複合語の場合は 2 字以上) が表語単位となる点を確認させる。

このとき、アルファベットは、下の図 4 に見るように、現在のような単語の「分かち書き」は紀元 1 世紀頃までは行なわれず、語と語の間にスペースを入れないで続けて書かれていたということを強調し、単語の分かち書きは、言語単位を視覚的に明示する必要性から生まれたものであることを理解させることが重要である。



図 4 ローマ皇帝ネロ (37~68) の演説を記録したギリシア語のアルファベット  
(ジャン (1990:65) より引用)

次に、大文字や斜体字のような字形について理解しておくことも、スペリングあるいは語彙の指導に役立つと思われる。歴史的には、古代のギリシア文字やラテン文字[ローマ文字]は、もともと大文字 (majuscule) のみで、小文字 (minuscule) が生まれるのは、ローマ帝国で常用されていた草書体 (cursive writing) (図 5 を参照) の影響で、数世紀後のことである。<sup>22)</sup>



'Descriptum et recognitum  
factum ex libello qui propo  
situs erat ...  
.....'

図 5 蝋板に書かれたラテン文字の草書体  
(紀元 167 年)  
(Fischer (2001:146) より引用)

ここで、今日、なぜ小文字の他に大文字や斜体字などが用いられているのかについて考えさせることは非常に意味があると言える。すでに上述したように、アルファベットの本来的な機能は表音であるため、もともと表語 (それゆえ表意) には適していない文字体系である。アルファベットのような表音を第一目的とする文字体系であれば、当然のことながら表語 (それゆえ表意) に関わる不備は避けられない。実は、このような不備を補う必要性から生まれたのが、大文字と小文字、立体と斜体字といった字形の対立であると考えられる。この点は特に強調しておきたい。例として、同音の bill と Bill を字形によって意味的に区別したり、外国語を表すのに斜体字を用いるというような工夫を取り上げるとよい。また、英語の knight のような発音されない黙字 k を含む単語を取り上げて、黙字について説明させるのもよい。説明では、knight は表音という点では決して合理的とは言えないが、表語や表意という点では night との区別に役立っており、それゆえ発音されない k のような文字も視覚的には必要である<sup>23)</sup> という点を押えさせたい。

### 3. 3 言語処理のプロセス

時間的な余裕があれば、少し難しいかもしれないが、神経心理学の研究成果<sup>24)</sup> について解説するのも必要であると思われる。例えば、アルファベット文字と漢字の場合では、脳における言語処理のプロセスが異なっているという研究結果について説明

することは、文字体系の本質について考えるという意味では有意義であると思われる。説明の概略は、漢字を読む場合は、単語（つまり字）の視覚イメージが脳に記憶されるため、音韻処理を経ないで視覚的刺激から直接レキシコンの意味情報にアクセスできるが、アルファベット文字を読む場合は、単語（つまり<sup>レター</sup>文字のまとまり）の視覚イメージは脳に記憶され難く、直接意味処理ができないため、まず音韻処理をしてから意味情報へと進むいわば間接的プロセスを経ると考えられるというようなものとなる。

#### 4. 漢字仮名交じりの文字体系の特徴

ここでは、日本の文字体系は、漢字だけでなく仮名だけでなく、その両方を取り入れていることについて考えさせたい。「日本人は、どうして2種類の異なる表記システムを併用しているのであろうか？」というような疑問から始めるのもよい。

(i) まず、一般に、中国語のように漢字が連続するよりも、漢字と漢字の間に平仮名が入る方が言語単位の明示という点で視覚的な効果を持つと思われるが、実際、このことを裏づけるような実験結果が、視覚情報処理の分野において提示された<sup>25)</sup> ことについて説明する。ついでに、平仮名を「送り仮名」として使用することで漢字の読みが特定できるという利点について触れておくのもよい。

(ii) 神経心理学分野での研究結果について解説する。特に、例えば「羽根」と「はね」のような漢字単語と平仮名単語をそれぞれの単語リストから探し出すとき、その処理に費やす時間はどのくらいかかるのかという実験では、漢字の方が平仮名よりも処理時間が短いという結果が示されたが、この実験結果は、漢字は音韻処理しなくても意味処理が可能であるが、平仮名の場合は音韻処理を経ってから意味処理が行われるという、漢字とアルファベット文字の場合に示されたのと同様の結論を導き出す十分な証拠となりうる<sup>26)</sup> ということについては説明しておきたい。

(iii) 最後に、まとめとして、英語のアルファベット文字体系は、音を表すことを目指した表記システムであるのに対して、日本語の漢字仮名交じりの文字体系は、意味と音の両方を表わすことを目指した、いわば効率のよい表記システムであると考えられるということを是非とも押えておきたい。

#### IV. 結語

本稿では、まず、特に中学校における英語教育の実践に際して、英語学習者の障壁となり得るものの中にはアルファベット文字体系が原因となるものがあることを指摘し、将来英語教師を目指す学生にとって、音声指導を始め、スペリング指導や語彙指導のような教育実践現場において、より効果的な学習指導を行なうためにはアルファベットについての理解が不可欠であると述べた。さらに、アルファベットについて理解するには、アルファベットの起源や伝播に関する基礎的な知識を始め、アルファベットと英語学習者が日常用いている漢字や仮名との文字論的な比較が必要であるという主張の下で、大学の講義における教育内容について論じ、具体的な教授内容と教授手順を提示した。

英語教師を目指す学生にとって、英語のアルファベット文字体系は表音を目指した表記システムであるのに対して、日本語の漢字仮名交じりの文字体系は、表語（表意）と表音の両方を目指した表記システムであり、このような文字体系の違いが英語と日本語の音声面や形態面での重要な違いを生み出しているということを理解しておくことは、将来教育実践現場において、生徒からの様々な質問に答えることのできる実践的な応用力へと繋がっていくものと思われる。

#### 注

- 1) 小篠（2002）を参照。
- 2) 音節（syllable）の概念を明確にするのは簡単なことではない。今まで、音声学と音韻論の両方の立場から様々な提案がなされてきた。代表的なものとしては、卓立（prominence）を利用するもの、聞こえ（sonority）という尺度によるもの、子音や母音の結合の仕方、つまり音連鎖（sequence）のパターンによるものなどがある。本稿では、瀬田・脇本・小迫（2002a）に従って、英語教育という点で最も効果的だと思われる音連鎖パターンに基づく音韻論的提案を採用することにする。音節の概念について詳しくはCrystal（1985:297-298）を参照。
- 3) 正確には「ローマ・アルファベット」あるいは「ラテン・アルファベット」と呼ぶべきであるが、特に問題がない場合に限り、ローマ[ラテン]・アル

ファベットの意味で単に「アルファベット」と表記する。

- 4) 文字や文字体系の本質について研究する分野は「文字論」と呼ばれることもあるが、今のところ、「文字論」と「文字学」の用語の区別ははっきりとしているわけではない。この点については、河野 (1994)、亀井 他 (編著) (1996)、瀬田 (2008 年出版予定)などを参照。
- 5) 例えば、渡辺 (1983)、コツィオル (1973)、Brook (1973)、Crystal (1993)、Pyles (1968)、モセ (1963)などを参照。
- 6) ジャン (1990:55-57)を参照。
- 7) カルヴェ (1998:111)を参照。
- 8) Fischer (2001:39, 83-84)を参照。
- 9) Fischer (2001:85)を参照。
- 10) Coulmas (1989:158-159)、Fischer (2001:122)を参照。
- 11) Fischer (1999:97)、Fischer (2001:124-127)を参照。
- 12) ジャン (1990:67)によると、17の子音字と5つの母音字から成る。
- 13) (1)の例はRobinson (1995:173)より引用。
- 14) ただし、この説については異論もある。ジャン (1990:68-70)を参照。
- 15) Fischer (2001:140)を参照。
- 16) Fischer (2001:141-143)を参照。
- 17) Fischer (1999:100)を参照。
- 18) Smith (1996:209)を参照。
- 19) Fischer (1999:104)を参照。
- 20) Coulmas (1989:124)を参照。
- 21) Fischer (2001:199-200)を参照。
- 22) Fischer (2001:131, 145)を参照。
- 23) これに関しては、河野 (1994:20)、Fischer (2001:204)を参照。
- 24) Tzeng *et al.* (1977)、Tzeng *et al.* (1979)などを参照。
- 25) 例えば、芋阪 (1998)を参照。
- 26) 御領 (1987)を参照。

#### 引用・参考文献

- 1) Brook, G. L.: *A History of the English Language*, ed. with notes by Kotaro Ishibashi and Kunio Nakashima, Nan'un-do, Tokyo, 1973.
- 2) カルヴェ, ルイ=ジャン (Louis-Jean Calvet) (1998): [会津 洋・前島和也 (訳)]『文字の世界史』, 河出書房新社, 東京.
- 3) Coulmas, Florian: *The Writing Systems of the World*, Basil Blackwell, Oxford, 1989.
- 4) Crystal, David: *Dictionary of Linguistics and Phonetics*, Blackwell, Oxford, [1980] 1985<sup>2</sup>.
- 5) Crystal, David: *The History of English*, notes by Tadao Kubouchi, Hiromitsu Yamagata and Akira Baba, Kinseido, Tokyo, 1993.
- 6) Fischer, Steven R.: *A History of Language*, Reaktion Books, London, 1999.
- 7) Fischer, Steven R.: *A History of Writing*, Reaktion Books, London, 2001.
- 8) 御領 謙:『読むということ』, 東京大学出版会, 東京, 1987.
- 9) ジャン, ジョルジュ (Georges Jean) (1990): [矢島文夫 (監修)]『文字の歴史』, 創元社, 大阪.
- 10) 亀井 孝・河野六郎・千野栄一 (編著):『言語学大辞典』第6巻「術語編」, 三省堂, 東京, 1996.
- 11) 河野六郎:『文字論』, 三省堂, 東京, 1994.
- 12) 小迫 勝, 瀬田幸人, 脇本恭子:「英語教育内容学の構築に向けて—英語史に基づいた教育実践試案」, 『英語教育実践学』, 250-264, 開隆堂, 東京, 2005.
- 13) コツィオル, ヘルベルト (Herbert Koziol) (1973): [小野茂 (訳)]『英語史入門』, 南雲堂, 東京.
- 14) 芋阪直行:「移動窓による読みの実験的研究—周辺視と読みの関係—」, 芋阪直行 (編)『読み—脳と心の情報処理』, 17-41, 朝倉書店, 東京, 1998.
- 15) Smith, Janet S. (Shibamoto): "Japanese Writing," in Peter T. Daniels and William Bright (ed.) *The World's Writing Systems*, 209-217, Oxford University Press, New York, 1996.
- 16) 松浦伸和 他:「英語教育内容学の構築 (1) —その理念と研究方法—」, 日本教育大学協会外国語部門紀要創刊号, 日本教育大学協会外国語部門編, 2002.
- 17) モセ, フェルナン (Fernand Mossé) (1963): [郡司利男・岡田尚 (訳)]『英語史概説』, 開文社出版, 東京.
- 18) 小篠敏明:『英語教育内容学の構築』プロジェ



- クトへの期待」, 日本教育大学協会紀要, 長野, 2002.
- 19) Pyles, Thomas: *The English Language: A Brief History*, Holt, Rinehart and Winston, New York, 1968.
- 20) Robinson, Andrew: *The Story of Writing*, Thames and Hudson, London, 1995.
- 21) 瀬田幸人, 脇本恭子, 小迫 勝: 「音声学・音韻論に基づいた英語教育内容学の構築に向けて」, 『岡山大学教育学部研究集録』第121号, 61-71, 2002a.
- 22) 瀬田幸人, 脇本恭子, 小迫 勝: 「統語論・形態論に基づいた英語教育内容学の構築に向けて」, 『岡山大学教育学部研究集録』第121号, 73-83, 2002b.
- 23) 瀬田幸人: 「文字論」, 今井邦彦 (編著) 『言語学の領域 (II)』, 朝倉書店, 東京, (2008 年出版予定)
- 24) Tzeng, O. J., D. L. Hung and W. S.-Y. Wang: "Speech Recoding in Reading Chinese Characters," *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory* 3: 621-630, 1977.
- 25) Tzeng, O. J., D. L. Hung, B. Cotton and W. S.-Y. Wang: "Visual Lateralization Effect in Reading Chinese Characters," *Nature* 282, 499-501, 1979.
- 26) 脇本恭子, 瀬田幸人, 小迫 勝: 「社会言語学・語用論・コーパス言語学に基づいた英語教育内容学の構築に向けて」, 『岡山大学教育学部研究集録』第122号, 75-88, 2003.
- 27) 渡辺昇一: 『英語の歴史』, 大修館, 東京, 1983.

Title: On Alphabetic Writing System in English Language Education

Yukito SETA (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract: This paper aims to show a way of teaching in a framework of integrated studies in English language education which helps to solve some problems that probably hinder the junior (and/or senior) high school students from learning English. First, it is shown that some of the problems which the students encounter in English learning are closely related with the alphabetic writing system. Then, some important pieces of background knowledge about it (e.g., its history, its difference from the Japanese writing system, i.e. the writing system in *kana* mixed with Chinese characters, etc.) are given, and it is demonstrated how necessary it is to teach them at the university. Finally, some concrete model and its procedure for teaching background knowledge about the alphabetic writing system are proposed.

Keywords: alphabet, *kana* (the Japanese syllabaries), writing system, integrated studies in English language education

